

《ガヤガヤガヤ……》

(夜の繁華街の音、以下背景でうつすら)

娼婦

「ふふ、素敵な夜だったわぁ♪

ん、ちゅう♪」

少し遠出の冒険を終え、仕事あがりのいつもの楽しみとして馴染みの娼婦と楽しんだ貴方。

冒険者として仕事を始めて随分経ったが、このルーチンもこの頃は日常のように思えるようになってきていた。

娼婦

「ちゅっちゅう……ちゅう、ちゆるっ♪

んっ……ふふ、貴方のキスって丁寧よね？ 私、そういうの好きよ♪

今日も有難う、また遊びに来てよねえ♪」

《ざっ……》

(※歩き出す足音)

いつもより少し情熱的な、娼婦からのキスの見送りをされながら、酒と彼女を楽しんだ余韻に少し酔ったような、ふわふわとした思考のまま彼女と別れる、貴方。

初心者である内に命を落とす者も多い冒険者稼業につきながら、一流……とまではいかないまでも、最近は確実に稼ぎを作れるようになり、

十分に中堅といえるだけの実力と立場を手に来るようになったと言えるだろう。

《ガヤガヤガヤ》

（繁華街の声、男達の喜びや嘆きの声が僅かに）

貴方は周囲の同じように夜を楽しんでいる男達や、失敗でもしたのかくだを巻く男達を横目に見ながら、その感触に確かな満足感を覚えていた。

もう少し金が貯まったら、新しい装備に買い替えをして少し上を目指して挑戦してみてもいいか……などと、

そんな事を霞がかった頭で思いながら、同時に感じる確かな満足感を樂しみつつ、貴方は帰路にっこうとしていた。

《どんっ！》

（少女がぶつかってくる音）

ノラ

「あつぶねえなあ！ 気をつけろよ、おっさん！」

《タッタッタッタ！》

（少女が慌てて駆け去る音）

突如、背中に小さな衝撃が走る。

勢いに体が流されそうになるのをこらえながら振り返ると、くすんだ金

色の髪をなびかせた少しみすばらしい格好の少女が走り去っていく所であつた。

氣配に氣付かないなんて少し酔い過ぎていたのか……などと、反省氣味に思っていると、ふと……懷が先ほどまでより軽くなっている事に氣付いてしまう。

まさか、と思ひ懷に手を入れると、先ほど娼婦に支払つた後確かに仕舞つた筈の財布にしている皮袋が、そこにはなかつた。

ノラ

「げっ、氣付いたか？　くそっ！」

慌てて先ほどの少女の姿を探すと、少し先の路地にへと小さく金の髪が尾を引き消えていく所を貴方は見るける。

逃げ去られてはならないと、仮にも冒険者として身を立ててる者としては何て不甲斐ない、という氣持ちを押し殺しながら、貴方は消えいくその金の跡を追ひ、駆け出すのであつた。

《ダッダッダッダ……》

（慌てて追いかける音）